

6月9日(木)

おはようございます。

私の古い友人に、早稲田大学の石濱裕美子教授がいらっしゃいます。石濱先生とは三十年来のお付き合いです。あるとき私が仕事をする上でしんどい時期がありました。その時に、カルマッパというお坊さんの言葉を私に贈ってくださったことがあります。それは「絵に描いた炎になってならない」という言葉でした。どういうことかというのと、絵に描いた炎は周りを照らすことはなく、本物の炎だけが暗闇を照らすことができるという意味で、とても強く印象に残りました。

これを私は、自分の内容が本物であれば、しんどいときにこそ、その値打ちを輝かすことができるということ、あるいは、本物であるからこそ迷っている人たちを正しく導いていくことができるということだと考え、大変勇気づけられたことを覚えています。

話は変わりますが、五月の連休中に新大阪の駅で家内と歩いていたら、清風のOBの青木くんといって、儀満先生の学年で六カ年の生徒だった彼が声をかけてくれました。「先生今年は大学の進学成績がよかったですね」と言ってくれました。「君はどここの大学に行っているの?」と聞いたら、「ぼくは早稲田の国際教養学部に行っております」ということでした。そこで、私が石濱先生を知っているのだよと言ったのでした。

このことを私はもう忘れていたのですが、高野山の修養行事をしているときに、先生の特別なお誕生日の日があり、電話をしました。そのとき先生が次のような話をして下さいました。

学部は違う青木くんが、先生の授業を受けに来たそうです。その時彼は、「ぼく清風です」というふうに言った。先生がおっしゃるには、一般に自分の出身校を言う早稲田の学生などほとんどいない。しかしそのように言う清風高校出身の学生は、彼だけではなくしばしばあるのだそうです。それには、先生がチベットの研究をされていることも関係あるでしょうし、学園長や私が朝礼等で、チベットの話をするというのも関係あるでしょう。ただ私が大変嬉しかったのは、「どの子も擦れていないし、どの子も感じがいい」と先生が言ってくださったことです。

大阪のど真ん中にある学校であるにもかかわらず、卒業した子どもたちが擦れてなくて、とても感じのいい人になっているというのですから。

先生はお世辞をいうような人ではありませんから、本当にそのよ

うに感じていらっしゃるのだと思って、とても嬉しくなりました。早稲田にきている学生は、難しく、純真さを失い擦れている人が多いのだそうです。都会の学校はほとんど似たようなものであるなかで、大阪のど真ん中にある清風の卒業生だけがぜんぜん擦れてなく、感じがいいというのは、日頃から教育に力を注いで下さっている先生方のお陰であり賜物であると思います。どちらかという、いつも厳しいことばかりおっしゃっている石濱先生がこうして褒めてくださる。珍しいことですが、本当のことだと感じます。

私はたいへん誇らしい気持ちになりました。先輩方が擦れてなくて、どの子も感じがいいと言っていたから、諸君たちもそういう先輩にやがてなれるように自分をしっかり育てていてもらいたいと思います。

今朝の話はこれで終わります。

学校長